おもちゃ図書館がつなぐ
心とこころ

おもちゃの図書館

育成ハンドブックNo.68
2009年９月発行

おもちゃと遊びについて学びましょう

財団法人　日本児童福祉協会

～おもちゃと遊びについて学びましょう～

おもちゃの図書館全国連絡会　事務局世話人　峯島紀子

1　はじめに

子どもにとって遊びはすべての原点です。食べている時と眠っている時以外、その生活すべてが遊びであるといっても過言ではありません。まさに、遊びは子どもにとって生活そのものなのです。そしてその“遊び”を更に豊かに発展させる媒体として“おもちゃ”があります。

おもちゃは子どもの遊びを発展させ、子どもの創造性を豊かにし、心身の成長と発達に大きな影響を及ぼすので、その選び方や与え方については充分な配慮や知識が重要です。また、おもちゃ図書館に遊びに来る子ども達は、おもちゃで上手に遊べないことが多く、ボランティアとおもちゃで楽しく遊ぶことによって情緒の発達やコミュニケーション機能の発達も促されます。

このように大事な役割を果たしているおもちゃ図書館のおもちゃと遊びについてご一緒に考えて見たいと思います。

目 次

～おもちゃと遊びについて学びましょう～
1. はじめに …… 2
2. 子どもと遊び …… 3
3. おもちゃで遊べない理由 …… 4
4. 障害のある子どもに良いおもちゃ …… 5
5. 障害のある子どもとおもちゃで遊ぶには？ …… 6
6. おもちゃへの理解 …… 8
7. おわりに …… 10
あそびの中に
1. 発想をかえて …… 11
2. わくわく☆ドキドキ☆おもちゃ図書館 …… 12
3. 厚別おもちゃ図書館の七夕まつり …… 13
トイ・ドクターリレートーク「クレヨンしんちゃんの町」春日部 …… 14
DVD の紹介 …… 15

2　子どもと遊び

“遊び”には三つの特徴があります。

第一に、その活動が自発的であることです。誰かから指示されたものでなく、活動のきっかけが自発的であることが大切です。

第二に、活動の過程において自律的（自分で律する、自分で決める）であることです。どのように遊ぶかという活動の過程、つまり遊び方を周囲の人間が決めるのでなく、子ども自身が決定することが重要です。

第三に、活動の評価をするのは子ども自身であるということです。遊び終えた子ども自身が、「ああ楽しかった」という満足感を伴って終わるのが遊びなのです。

もともと遊びはその活動自体が目的なのです。 機能の発達を促すことが目的ではないので、「このおもちゃで遊んだ結果これが出来るようになった」などと、その成果で遊びを評価してはいけません。活動の評価においても主体的であるということが遊びの第三の特徴です。

では、おもちゃ図書館での遊びを考えて見ましょう。子ども達は自由におもちゃを選び（第一の特徴）、ボランティアさんと一緒に自分の思いどおりに遊びます（第二の特徴）。機能訓練や専門の指導者による療育指導の場での遊びとは異なります。自由に自発的に遊ぶ中で、楽しみは倍増され、遊びの幅が広がり、やりたいことができた時の満足感は何ものにも代えがたいものとなります（第三の特徴）。でもそれだけではありません。楽しい遊びを通して運動機能や知能・コミュニケーション機能の発達などが促されます。これこそ、「おもちゃ図書館のうれしいおまけ」なのです。

写真Ａ　ハウスクーゲルバーン

写真Ｂ　くるくるチャイム

3　おもちゃで遊べない理由

おもちゃ遊びに夢中になっている子どもの姿を見ると、遊びが自発的で楽しい活動であることがよくわかります。でも障害のある子どもの中には、おもちゃに見向きもしなかったり、喜びもしなければ遊ぼうとしない、という場合も見受けられます。

遊びは子どもにとって大切な仕事であり、生活そのものです。遊びは身体の健康や心身の発達に深い関わりを持っています。障害のある子ども達は、上手に遊べないために成長発達に貴重な機会や時間を無為に過ごしているともいえましょう。

では、障害のあるこどもは、なぜおもちゃで遊ばないのでしょう？　また、なぜ遊べないのか、その理由を考えてみましょう。

子どもの側の理由

① 周囲に対する興味・関心がうすいためおもちゃに注意が向かず、また、喜びの発見に時間がかかるためおもちゃに対する興味が長続きしない。

② 見たり触ったりしてみても扱い方がわからない。

③ 扱い方がわかっても、操作に必要な運動能力が不足しているために遊べない。

④ 視覚障害・聴覚障害があるため遊べない。

⑤ おもちゃに対する強い拒絶や、他の物に対する強いこだわりがあるために遊べない。

遊び相手となる大人の側の理由

① 子どもがどのようなおもちゃに興味を持つのかわからない。

② 子どもの発達段階にあうおもちゃをみつけられない。

③ 子どもとどのように遊べばよいのかわからない。

④ 子どもと遊ぶのが好きでない。

子どもの良い遊び相手になるには、おもちゃ図書館のボランティア自身が子どもの頃のままのみずみずしい感性や、遊びを楽しむ心、精神的ゆとりなどを持ち続けることが大切です。そして、おもちゃについての知識や発達についての理解も必要ですが、「**子どもが大好きで、子どもと遊ぶことが心底楽しいと思えること**」が何より重要なのです。

4　障害のある子どもに良いおもちゃ

原則として、障害のない子どもにとって良いおもちゃであれば、障害のある子どもにも良いおもちゃであるといえましょう。ただし、障害のある子どもの場合は、それぞれの機能に合わせて工夫が必要になることがあります。

障害のある子どもに良いおもちゃの条件を考えて見ましょう。

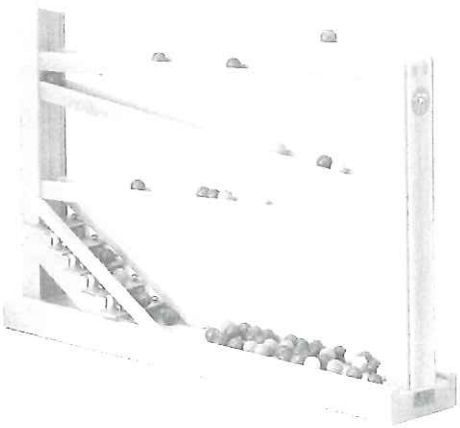
① 子どもにとって楽しい魅力のあるおもちゃ
- 明るい色・はっきりした色のおもちゃ
- きれいな音色・優しい音色のおもちゃ
- ハッとするような動きのあるおもちゃ
- 心地よい感触や形のもの
- 原因と結果がはっきりしているもの

② 操作がしやすいこと

③ 安全性が高いこと

④ 壊れにくく丈夫なこと

⑤ 清潔を保ちやすいこと



写真Ｃ　玉の塔（クーゲルバーン）

これ等は言うまでもなく、一般の良いおもちゃの条件と少しも変わりません。

ただし、どんなに良いおもちゃであっても、子どもの発達段階に合わないものには子ども達は興味を示しません。特に障害のある子どもの場合は、おもちゃへの関心や興味を持つ力が弱かったり、ゆっくりだったりするので、それぞれの発達段階に合わせて楽しく遊べるおもちゃを選ぶ必要があります。また手先が器用でないためおもちゃを上手に操作出来ないので、様々な工夫が必要になります。例えば、電動おもちゃで遊ぶためのスイッチの工夫(接触スイッチ等)や、パズルや型はめの小さなつまみにゴルフのティーを利用してつまみやすくするなどです。

また、様々な工夫が出来る素材として布があります。布は衣類や寝具として身近に触れる暖かく柔らかで安全性の高い素材です。皆さんご存知のように、おもちゃ図書館では沢山の布の手作りおもちゃで楽しく遊ぶうちに、子ども達の手や指の機能の発達が促されています。

5　障害のある子どもとおもちゃで遊ぶには？

留意点

障害のある子どもとおもちゃで遊ぶ時、どのようなおもちゃを好きなのか、又どのようなおもちゃが苦手なのかお母さんに伺ってみましょう。特定の音をひどく嫌うお子さんもいます。おもちゃで遊べない、または遊ばない子どももいます。きめ細かな観察とお母さんからの情報を得て、子どもの状態を理解するよう務めましょう。

障害のある子どもは要求や感情を表すサインが非常に弱かったり、ゆっくりだったりします。子どもの声や表情、動きなど、小さな変化にも気付く力を養いましょう。どんなに小さいサインも見逃さず確実に把握出来れば、子どもの関心の対象や好きなおもちゃがわかって来ます。そのためには、子どもの気持ちに寄り添って、子どもと一体化し共感することが大切です。

また、子どもの発達段階と機能にあったおもちゃを選ぶことも大切です。発達段階に合わないおもちゃには子どもは興味を持ちません。関心を持ったとしてもすぐに飽きてしまいます。機能にあわないおもちゃは自分で操作出来ず、依頼心を助長する結果になります。

障害のある子どももそれぞれの個性を持つ一人の子どもです。その子の個性や意志を尊重しましょう。子どもが自分の意志で気に入ったおもちゃを選んで遊び、自分の望むやり方で遊びに熱中する時、集中力が増し、集中時間ものびるのです。その結果、「ああ楽しかった」という満足感・達成感といっしょに機能の発達というううれしいおまけも付いてくるのです。

このように遊んでみましょう。

（1）子どもと同じ目の高さで向かい合う

実際に向かい合うことも大事ですが、場合によっては気持ちが正面から向かい合う、つまり気持ちをひとつに、ということが大切なのです。

床に座って子どもと向かい合って遊ぶ、小さな子どもの場合は床の上に寝そべって子どもと同じ目線の位置・背の高さで遊ぶ、小さなテーブルをはさんで向かい合って一緒に遊ぶのもよいでしょう。また子どもを膝に抱いたり、横に並んで座ったりと、実際に

向かい合っていなくても子どもと同じ目の高さで、子どもと同じ気持ちを共有し一体となって、一緒におもちゃ遊びをしましょう。

向かい合う姿勢・気持ちで子どもとかかわる時、子どもと遊びを共有し、楽しさや感激をともに味わうことが出来るのです。

（2）何度もやって見せる

おもちゃに関心を示さないだけでなく、その存在に気付かない子どももいます。おもちゃを視界に入るようにきちんと見せて、繰り返し遊んでみせます。「たのしいねえ」「おもしろいねえ」などと少しオーバーなリアクションもよいでしょう。「やってみたいなあ」と子どもにやる気を起こさせてタイミングをはかることが大切です。

（3）遊びに誘う

子どもが「さわってみたいなあ」「動かしてみようかな」という気持ちになったらおもちゃで一緒に遊びます。子どもが喜ばない時はあまり長く遊ばず別のおもちゃととりかえます。子どもを遊びに誘う時は、子どもの発達段階に応じて、手をとって一緒に遊ぶ、必要な時に手を添える、適切な言葉をかけるなどしましょう。声をかける時には、子どもの理解力に応じて簡単な言葉で、短くはっきり大きな声で伝えましょう。

（4）待つ心と手をかしながら

おもちゃで遊び出したら子どもの様子を注意深く見守りましょう。手助けを必要としているようならタイミングよくすばやく関わりましょう。

ただし手助けするのが早すぎると遊びを強制することになるので注意が必要です。子どもの自由な発想や創造性を摘みとってしまいます。子どものやる気も失われてしまいます。失敗は成功のもとです。失敗しても試行錯誤の中から子どもが解決するのを待ちましょう。その子どもが楽しめる新しい遊び方の発見があるかもしれません。

逆に、あまりにも長くとまどいまごつくと子どもはおもちゃへの興味を失い、やる気をなくしてしまいます。手助けするタイミングが重要です。手をとって一緒に遊ぶ、身振りで示す、言葉をかけるなど、状況に応じて手伝います。しかしこの時大切なのは、こどもが「自分の力でやれた」と成功感･達成感を味わえるような上手な援助の仕方です。たとえばパズル遊びで正しいピースを手渡す、正しい場所を指し示す、ピースをはめやすいような位置に盤を動かしてあげるなどの手助けがあったにしても、成功すれば子どもは大喜びできます。

上達してきたら手助けの量をだんだん減らしていきます。子どもが失敗感を味わうことのないよう上手に援助しましょう。

（5）共感しほめる

うまく遊べた時やどういう形であれ子どもが自分の思うように遊べて満足した時には、心から共感してほめてあげることが大切です。遊び相手のボランティアも、子どものほこらしげな表情・満足感や達成感にうれしさや喜びを感じていることと思います。その喜びを子どもと共有し、いっぱいほめてあげてください。子どもは、手助けされて出来たことでも「出来た！」という喜びに満たされています。ほめられることでその満足感・達成感はさらにふくらんで、「もっとやってみよう！」というやる気につながります。

ほめ方も大事です。その理解力にあわせて、頭やほほをなでる、手をたたいてほめる、言葉や励ましのほほえみによる賞賛など、こどもが喜ぶ方法でほめましょう。

6　おもちゃへの理解

同じ機能のおもちゃでもいろいろです

同じ機能を持つおもちゃでも、一つひとつ特徴があります。それぞれの特徴を見極めておもちゃを選びましょう。

たとえばいろいろな発達の基礎になるのが、物を良く見る・じっと見る力（固視）と、動きを目で追う・見続ける力（追視機能）です。固視・追視機能の発達を促すおもちゃとしてまずあげられるのが玉おとしの仲間のおもちゃです。転がり落ちる玉に注目して、動きを目で追い、物を見続ける力を養うことは集中力を養うことにもつながります。

（1）ハウスクーゲルバーン（写真A　ページ3参照）

木でできた家の煙突の穴に、木製の玉を入れて転がり落ちるのを楽しむおもちゃです。赤・黄・緑の3個のボールが色鮮やかで子どもの目をひきつけます。「赤い玉だねぇ」等の声かけで、子ども達は自然に色も覚えます。玉の大きさも握りやすいので、年齢が小さい子ども、手にまひがあるために小さな玉をつまめない子どもでも、比較的簡単に握って一人で遊べる利点があります。又、家の裏側の見えない部分を玉が転がり落ちるので、「見えない部分での玉の動きを予測して追い続ける力」「予期的追視機能」の発達も促されます。

（2）くるくるチャイム（写真B　ページ3参照）

色あざやかなプラスチックのボールが透明なタワーの内部をまわりながら転がり落ちます。

玉の大きさがハウスクーゲルバーン同様握りやすく出来ています。回りながら落ちていくスピードが比較的遅いので、又、本体が透明なので最後まで楽しみながら目で追い続けるうちに追試機能が養われます。

（3）玉の塔（クーゲルバーン）（写真C　ページ5参照）

小さな玉を最上段の端の小さな穴に入れると、溝にそって右へ左へと転がり落ち、最後に鉄琴の階段を一段一段澄んだ音色を響かせながら下って行きます。右へ左へと転がり落ちる玉の速度や鉄琴の音に、何ともいえない配合の妙があって子ども達の目をひきつけます。しかし、玉も穴も小さいので、最初は一緒に遊んであげることが必要になります。また、玉が転がり落ちる速度が速いので、追視機能を養うのには、くるくるチャイムのように玉がゆっくり転がり落ちるおもちゃのほうが適する場合もあります。

このように追視機能の発達に役立つ、同じ機能を持つおもちゃでもいろいろです。一人ひとりの発達段階や興味・関心にあわせておもちゃを選びましょう。

おもちゃが持つ多様な効果

一つひとつのおもちゃはいろいろな機能の発達を同時に促すことが出来ます。クーゲルバーンを例にあげて説明します。

（1）物を見続ける力を養います。

クーゲルバーンで遊ぶ子どもは、転がり落ちる玉を見ながら音を楽しみ、あきることなく遊ぶうちに、自然に追視機能が養われます。

（2）手と指の使い方が上手になります。

小さな玉をつまんで穴に入れることから遊びが始まるので、手や指の細かい動き（手指の巧緻動作）が養われます。クーゲルバーンの楽しさにひかれて長時間遊ぶうちに、始めは玉をわしづかみにしていたのが、親指と人さし指で上手につまめるようになります。

（3）目と手の協応の力を養います。

玉を穴に入れる動作は目と手の協応の発達に役立ちます。「物に手をのばして手にとる」

という私たちが普段何気なくしている動作でも、無意識のうちに物との距離感をはかり、腕や手や指の筋肉にどのくらいの力を入れて、どの方向に手を伸ばしたらよいのかを判断して行なっているのです。小さな穴に小さな玉を入れるには、穴をしっかり見て入れることが必要です。手もとをしっかり見て遊ぶことにより目と手の協応の力が、養われると、手もとをしっかり見て細かな手の動きや道具（スプーン・フォーク・お箸・はさみなど）を操作する力につながります。

穴が小さくて玉を上手に入れられない時は、ボール紙などでじょうごのようにし、広い口から玉を落とせるようにするとよいでしょう。じょうごの口をだんだん小さくして行くと、最後は穴に直接玉を入れられるようになります。

（4）集中力が養われます。

クーゲルバーンでの遊びの楽しさにつりこまれて一心不乱に玉をつまんでは穴に入れるという動作をくり返すうちに、集中力が養われて注意集中時間が長くなります。特別支援学校に通っていたあるお子さんの場合、集中力を養うために夏休みにペグの宿題が出ましたが少しもやろうとしませんでした。でもクーゲルバーンで遊びだしたら、楽しくて長く遊び続けることが出来て、夏休みが終わる頃には落ち着きが出てきたという例もありました。

クーゲルバーンを例にあげておもちゃが持つ多様な効果について述べました。一つのおもちゃにもいろいろな機能が備わっていることを念頭において遊び方の工夫をし、上手に声かけしながらお子さんたちと楽しく遊んで下さい。

7　おわりに

おもちゃ図書館での「おもちゃと遊び」について述べてきましたが、おもちゃ図書館のボランティアにとって何より大切なのは、子ども達と楽しく遊ぶ心、心のゆとり、子ども達の「ああ、楽しかった！」という満足感に対する心からの共感だと思います。

この一文が、子ども達との楽しい遊びに少しでもお役にたてたならとてもうれしいです。まずは皆さんが楽しんで下さい。

あそびの中に

1　発想をかえて

ある日のおもちゃ図書館での事です。2歳ぐらいの子どもが何人か集まっていて、お母さん方はおしゃべりをしたり、一緒に遊んでいたりしていました。「ここに入れて」「こうまわすんだよ」と声かけも楽しそうです。私も「たくさんあるね」とブロックを積み上げていました。

ところが、子どもはというと、声かけしているほど興味をむけて遊んでくれません。

私は高く積み上げたブロックを思いきってこわしてみました。その音に驚いた子ども達がまわりにやってきて、もう一回してという風な目で私を見ています。そこで、又一つ一つと積み上げているとブロックを渡してくれる子、自分で上に置こうとする子、手を出してこわそうとする子、じっと見ている子といろいろです。それから何回くり返した事でしょう。お母さんの中には露骨に嫌な顔をしている人もありました。ちょっとやり過ぎたかと反省!? しました。親としては初めからきちんと積み上げていく方が遊んでいると思えるのでしょうが、子どもの中にはこわれたからまた積み上げていくことがもっと楽しく思えるのでしょう。もしかすると、大人とは違う発想を持っているのかもしれません。

そういえば、私の息子（ダウン症・30歳）が同じ年のころ新聞に入っている広告のチラシを毎日やぶっていました。後片付けは大変でしたが、本人はとても気に入っていたようです。はじめは大きくやぶっていたのにだんだん小さくなり、そのうちに形らしき物を作るようになり糊つけもできるようになりました。一年間のうちでずいぶんチラシやぶりが進化して行ったのを思い出しました。

おもちゃで遊ぶということの前にこわすことややぶることも禁止行動ではなく、コミュニケーションとか興味につながっていくことがあるのではと思います。

それにしても、何でもありのおもちゃ図書館って結構居心地がよいです。

おもちゃの図書館全国連絡会　地区アドバイザー
福山おもちゃ図書館　朝川修子

2　わくわく☆ドキドキ☆おもちゃ図書館

活発で何をするか分からない探求心旺盛な子どもたちの隣に、どっしり構えたおばちゃんやおじさん、内気な子どもと物静かなおばあちゃん、いろんな人が集まっているおもちゃ図書館「宙」です。

「宙」はスタートして今年で12年目に入りました。学校が長期の休みに入ると、小学校高学年から中学、高校の子どもたちが顔を見せてくれます。そして発足当初からあるおもちゃを見つけては、懐かしそうに手にとって遊んでいる子どもの姿が印象的です。

A君は自動車が大好きな6年生、壊れそうなおもちゃを見つけると「直らないかなあ」とボランティアに相談してくれます。「直せないね」と返答されると、とても残念そうにしながら他のおもちゃを見つけて遊ぶのですが、自分の傍らに壊れたおもちゃを置いていると、いつまでも大切にしている思いが伝わってきます。時には小さな子どもたちに、遊び方を教えるその姿は誇らしげで張り切っていますが、よく見ていると本人が一番楽しんでいるようです。

子ども同士おもちゃの取り合いをする事もあります。そのような時は子どもの間に入って、Bちゃんがやりとりをしています。Cちゃんは小さい子どもたちに遊びのルールを教えて、上手に出来ると子どもたちを褒めています。みんなで「楽しい」を共有しています。

異年齢で遊ぶことが少なくなった今日この頃、おもちゃ図書館で大きくなった子どもたちが、おもちゃを媒体にして、小さな子どもたちに関わっている姿を見ていると、おもちゃ図書館は、みんなが一緒に楽しむ場を自然に提供していると感じています。さらに遊びを通して喜びや感動という気持ちを分かち合い、コミュニケーションの力を育んでいると思います。おもちゃ図書館には卒業がありません。誰がいつきてもよい場であり「ほっと」出来る場なのです。

そして、子どもだけでなく親もおもちゃ図書館でいろいろな人と出会い、気持ちを出し合い、関係を築ける場であると実感しています。

おもちゃの図書館全国連絡会　地区アドバイザー
近江八幡市おもちゃ図書館「宙」　榊原かず子

3　厚別おもちゃ図書館の七夕まつり

札幌では七夕まつりを８月にやります。ちょうど小学校の夏休み中なので小さな織姫さんと彦星さんが１年ぶりに顔をみせてくれました。

短冊に、＜バレエがうまくなりたい＞＜パティシエになりたい＞＜やきゅうせんしゅになりたい＞など願いごとを書いて飾ってくれました。

終わった後、子どもたちの作った短冊だけはごみとして捨てる気になりません。子どもたちの願いが叶うようにこっそりと川に流しました。

さて、今回あらためて子どもたちに人気のあるおもちゃはなにかと考えてみましたが、特にないように思います。子どもたちはおもちゃ箱の中から好きなおもちゃを探しだし思い思いに工夫しながら遊んでいます。とはいってもほかの子が遊んでいるおもちゃは気になるらしく「貸して貸して」がはじまります。

それから、子どもがレストランのシェフになり私たちスタッフが客になって「オムライスを下さい」などのなになにごっこは大好きなようです。

若いお母さんに聞きました、「家ではどんなおもちゃで遊んでいますか」。

「自分の家のおもちゃはもう飽きたらしくお友達の家のおもちゃでは夢中になって遊んでいる」とのこと。

ともあれ、大人の感覚で新しいおもちゃを与えるのではなく、遊びかたを工夫している子どもたちを少しだけ手助けするスタンスはどうでしょうか。

おもちゃの図書館全国連絡会　地区アドバイザー
厚別おもちゃ図書館　嶋田　修

トイ・ドクターリレートーク

「クレヨンしんちゃんの町」春日部

春日部市は東京から一時間ほどの所、埼玉県東部に位置する人口24万人ほどの小都市で、クレヨンしんちゃん、百畳敷き大凧と桐箪笥の町として知られています。

春日部おもちゃの病院は、市内２箇所の児童館を拠点に

それぞれ月一回活動しており、毎回10名前後のドクターが、おもちゃの修理に取り組んでいます。

もちろん皆さん専門家ではありません、「努力、知恵、あきらめない」をモットーに、お子さんの笑顔からパワーをもらって、どんなおもちゃでも直します。

最近のおもちゃは、電子音の出る楽器など修理に手間取ることも多くありますが、難しい故障はドクター全員で知恵を出し合って直し、すべての音が出た時には全員が手を打ってまるで子供のように大喜びしております。

おもちゃを受け取った子供たちの「ありがとう」の一言を励みにこれからも活動してまいります。

埼玉県　春日部おもちゃの病院「地球防衛軍」　斎藤　修

表紙の絵　「青い地球」　佐藤華織さん
裏表紙の絵　「きりんさん」　武田　真さん
岩手県　イーハトーブおもちゃライブラリー

DVDの紹介

発達障害の理解と支援
～わかり合うって、素敵だね！

企画；社団法人　日本発達障害福祉連盟
制作・著作　アローウィン

最近マスコミで、広汎性発達障害の問題が多く取り上げられています。「困っている原因や理由を大人が理解した上で学び方に配慮してあげることが大切」「学習が困難な子どものために教材を工夫したりして苦手だった学習が楽しくなった」との記事がありました。

このDVDでは、８つの発達障害「１、知的障害　２、自閉症　３、高機能自閉症・アスペルガー症候群　４、ADHD（注意欠陥多動性障害）　５、LD（学習障害）　６、脳性麻痺　７、重症心身障害　８、てんかん」について、特徴・医療面・教育・療育・個人の症状によっての関わり方・親の子育ての見守りや支援のあり方等が、専門家の話と映像でどなたにもわかりやすくまとめられています。

ボランティアの皆さんにもぜひご覧頂きたいと思います。

内容の一部紹介

知的障害に関しては、ダウン症を例に説明しています。ダウン症は　出生時に診断されるので、早期に療育を開始して、機能訓練や専門的指導を受けることで良い発達が促されます。また、早期に診断の告知を受けた保護者の方には精神面でのサポートが大切です。

DVDでは、親へのサポートの必要性や療育（保育・訓練）について、通園施設での保育風景や園長（小児科医）の話などによりわかりやすく説明されています。早期療育を受けた母親達の話も紹介され、参考になります。

自閉症に関しては、一時は母子関係のゆがみに原因があるという間違った考え方により、親達は「育て方が悪い・しつけが悪い」などいわれのない非難を受けて肩身の狭い思いをした時期がありましたが、原因不明の脳の成熟障害によって自閉症が発症すると考えられるようになりました。このＤＶＤでは、兄弟２人とも自閉症のお子さんを持ったご両親の関わり方が紹介されています。経験の積み重ねの中であらためて早期療育の必要性を感じました。

お子さんの心や行動に「なぜ？」「どうして？」と迷われている方々の参考になると思います。

東京都　新宿おもちゃの図書館あいじえん　松原ミチ

育成ハンドブック　No.68

発行　財団法人　日本児童福祉協会
〒160-0004　東京都新宿区四谷２－10－503
編集　おもちゃの図書館全国連絡会
〒104-0061　東京都中央区銀座4-14-6　ギンザエイトビル3F
電話０３（５５６５）０８２３　FAX ０３（５５６５）０８２４
E-mail：renrakukai@toylib.or.jp　URL：http://www.toylib.or.jp

※お問合せはおもちゃの図書館全国連絡会へお願いします。